

学生が捉えた精神科デイケアセンターの機能と教育方法への課題

—精神看護学実習記録からの検討—

澤田 由美¹⁾*・丹下 幸子²⁾

1) 看護学科 2) 看護学科非常勤臨地実習助手

(2008年11月12日受理)

精神看護学実習における精神科デイケアでの実習記録をもとに、精神科デイケアの機能と教育方法への課題を検討した。レポートの記述から、精神科デイケアの機能として【居場所になる】【ソーシャルスキルを再獲得する】【生活を再構築する】【自分と向き合う】の4つが抽出された。患者にとっての心の拠り所としての居場所は、自己の安定を図ることに関与し、仲間同士の関係性の構築や医療者との相談窓口としての機能は、生活自体に変化を起し、生活に必要なスキルや、無理をしないで人生を切り拓くための対処方法の獲得など、病気と共にある生活を再構築することに関与していた。自己洞察の場としての機能は、社会生活に適応するための日常生活の促進や、社会参加への希望を明確にし、病状の安定に関与していた。これらはデイケアにおける専門的な看護介入の基盤であり、学習内容を意味づけしていくことでさらなる教育効果が期待できることが示唆された。

(キーワード) 精神看護学実習 精神科デイケアセンター 教育方法

はじめに

日本における精神医療制度は、「病院から社会復帰施設へ」さらには、「社会復帰施設から地域へ」の流れに伴い、向精神病薬の開発や精神科リハビリテーション医療の進歩と共に、通院医療の役割が重要視されるようになった。1980年代から社会復帰施設や小規模作業所などへの整備が進み、1987年の精神保健法の改正以来、従来の隔離・収容を中心とした入院医療から、ノーマライゼーションに則した地域精神医療に向けて着実に歩み始めている。「精神保健福祉の改革に向けた今後の対策の方向」の中間報告¹⁾には、重点施策の一つとして、受け入れ条件が整えば退院可能な精神疾患患者（以下「患者」とする）の対策のための検討と課題が挙げられ、精神科デイケア（以下「デイケア」とする）や社会復帰施設の大幅な充足が盛り込まれている。また、患者の円滑な雇用促進を目的として、高齢・障害者雇用支援機構による『精神障害者総合雇用支援』『医療機関等との連携による精神障害者のジョブガイダンス事業』などの仕組みも整いつつある。しかし、入院患者の社会復帰や、地域における生活を支援するための施設、精神科看護の専門性を高める取り組みは十分に進んでいない状況があり、地域精神医療に関する課題は多い。

デイケアは、地域で生活している患者に対して、外来

治療では提供できない医学的・心理社会的治療を包括的に実施する場であり、精神科通院医療の一形態である。2004年に行われた厚生労働省の全国調査（精神保健福祉資料630）によると、デイケア等の利用者数は約3.7万人であり、年々増加傾向にある。地域精神医療の充足に伴い、デイケアにおける患者の地域生活継続のためのサポートは、今後ますます重要になってくることが予想されている。

A短期大学では、2週間の精神看護学実習（以下「実習」とする）において最終日に1日間のデイケア実習を取り入れている。精神疾患を抱えた患者が、地域でどのような生活をし、デイケアに何を期待しているのか、デイケアの機能や役割について利用者の語りを通して学ぶ貴重な機会となっている。

本研究では、実習において学生が捉えた「デイケアの機能」に関する学習内容から、利用者が捉えているデイケアの機能について分析し、デイケアにおける専門的な看護介入について学ぶための効果的な教育方法を検討した。

1. 研究目的

デイケアにおける学生の実習記録から、患者が捉えているデイケアの機能に関する学びの内容を明らかにし、

*連絡先：澤田由美 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

今後の教育方法への示唆を得る。

II. デイケア実習に関する指導内容

1. 実習概要

1) 実習時間

実習は90時間（9日間）2単位とし、8日間の精神科病棟実習を終えた翌日、1日間のデイケア実習を行っている。

2) デイケアの概要

単科の精神科病院に併設され、精神科デイケア（大規模）2単位を承認されている。登録患者数は200名を超え、ほとんどが統合失調症患者である。1日平均利用者数は100名前後、性差は10対2程度で男性が多い。原則的には週1回の主治医による診察を受けながら、8時半～15時までを過ごす。看護師長が責任者を務め、看護師のほか保健師・精神保健福祉士・臨床心理士・作業療法士・看護助手で構成されている。

3) 実習目的・目標

実習目的は以下の通りである

①精神の病気を抱え、日常生活や対人関係に障害をき

たしている人に、学生が自らを最大限に生かしなが
ら関わることを学ぶ。

②看護職と患者の人間関係を媒介として展開される精神科看護の実践を通し、患者を理解し、看護過程を展開する能力と態度を養う。

実習目標を表1に、デイケア実習に関する行動目標を表2に示した。

2. 指導内容

デイケア管理者によるオリエンテーションでは、病院におけるデイケアの位置づけ、概要、日程、職員の配置などを伝えている。ゆったりとした環境の中、プライバシーへの配慮や疾病のコントロールがされながら、患者が自分で一日の過ごし方を選択し、決定し、自由に参加できる体制を整えていることを強調し、デイケア活動の目的と実際を実感させている。学生たちは一日のデイケアメニューに参加しながら患者とともに過ごすのだが、その間に、コミュニケーション技法を用いながらそれぞれの患者の背景や抱えている問題に関心を向け、患者にとっての「社会復帰」の意味を考えていくよう指導している。

3. カンファレンス

表1 精神看護学実習の目標

- 1) 精神の病気が、患者の心理状態や日常生活にどのように影響しているかを捉える。
- 2) 患者を一個人として理解すると共に、看護職・患者関係のあり方について考える。
- 3) 患者は地域社会での生活者であることを理解し、問題解決のための看護過程を展開する。
- 4) 精神科における治療方法及び社会復帰活動を理解し、援助の方法を学ぶ。
- 5) 精神病院・病棟の環境や管理の方法と治療・看護の関連を学ぶ。
- 6) 患者を支援する様々な精神科専門職種との関連、看護職の役割と責任を認識する。
- 7) 学生が自らを最大限に生かしながら関わることを学ぶ。

表2 デイケア実習における行動目標

精神科医療の理解

- ① 精神科における治療方法及び社会復帰活動を理解し、援助の方法を学ぶ。
- ② 患者の状況に応じた医療やサポートの実際が理解できる。
- ③ 患者の社会復帰に向けたサポートシステムと看護の役割を考える。
- ④ 患者を支援する様々な精神科専門職種との関連、看護職の役割と責任について考える。
- ⑤ 患者を取り巻く法律を理解し、医療従事者としての役割を考える。

患者が帰路につくのを見届けたあと、臨地実習指導者・教員とともに1時間程度のカンファレンスを実施している。実習目標をどのように達成したのか、患者とのコミュニケーションを通して感じたり考えたりしたことを自由に発表し合い、意見交換の場としている。また、臨地実習指導者による説明として、デイケア、中間施設、共同作業所、ワークステーション、支援センターなどの社会復帰活動施設の役割と機能、精神保健医療福祉チームの各職種の役割などを聞く機会を設けている。

4. 実習記録

デイケア実習記録として、B4用紙にレポートを課している。一日の体験を通し、デイケアに通所している患者にとっての社会復帰の意味を考察し、患者の社会参加に向けての看護の役割について、精神保健福祉法との関連の中で考えさせている。

Ⅲ. 研究方法

1. 分析対象

A短期大学看護系学科の学生のうち、平成20年度精神看護学実習を3年次前期に履修した学生が、デイケア実習後に自由記載した実習記録を分析対象とした。

2. 分析方法

データの分析は、「精神疾患患者の社会復帰を支える看護」について考察した実習記録の内容を文脈ごとに分類、

質的に分析した。研究者が分析対象ごとのデータの中から、デイケアの機能や役割に関連のある言葉を選び出し、同一の意味内容ごとにまとめてラベル名をつけた。これを全ての記録で行った。その後、全てのラベルから共通性を検討し、類似するラベルをまとめて表題をつけた。さらにそれぞれの表題ごとの関連を分析し構造化した。

3. 倫理的配慮

学生に研究目的、方法、匿名性・機密性の保持、協力への同意の有無は成績に一切関与しないこと、自由意思での参加であることを文書にて説明した。データの取り扱い、データは本研究以外では使用しないこと、対象者が特定されないよう、記録類はID番号にて管理し個人名や施設名は全て匿名とした。さらに、分析に関する記録類は研究者以外の目には触れないように鍵のかかる場所で厳重に管理し、記録類の処分は研究者が責任を持って行った。実習記録をデータとして提供することに承諾の得られた24名分を分析対象とした。

Ⅳ. 結果

学生のレポートを分析した結果、患者が捉えているデイケアの機能として【居場所になる】【生活を再構築する】【ソーシャルスキルを再獲得する】【自分と向き合う】の4つが抽出された(表3)。以下カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〔〕、学生の記述を「」で示す。

表3 デイケアの機能

居場所	こころの居場所 (7) 楽しい場所 (5) 支援を受ける場所 (4)
ソーシャルスキルを再獲得する	人と関わる (13) 自分のペースをつかむ (4) 助け合う (6) 社会性を学ぶ (6)
生活を再構築する	生活のリズムを作る (11) 自立の準備 (4) 生き方を探る (6) 困難に立ち向かう (4)
自分と向き合う	自分を引き受ける (4) 自己決定する (9) 信念を持つ (2) 責任を持つ (2)

1. 利用者が求めているデイケアの機能

1) 居場所になる

【居場所になる】は、患者の心の拠り所としてのデイケアの機能を意味し、〔こころの居場所〕〔楽しい場所〕〔支援を受ける場所〕の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

〔こころの居場所〕では、「ただ来ることが目的だった」「辛くなった時の逃げ場」「心の居場所があるというだけでも、とても大きな安心感が得られる」など、明確な目的を持ってないでいる患者であっても、受け入れられていると実感できる場所としてのデイケアの機能をとらえていた。〔楽しい場所〕では、「友人に会うことが楽しみでデイケアに来ている」「仲間がで、支えあって何かを成し遂げることで、充実感が得られると考える」など、仲間同士の関係性を深め、楽しめる場所としてのデイケアの機能をとらえていた。また、〔支援を受ける場所〕では、「看護師に話をしたり、診察を受けたりする」「自分の困っていることを口に出したりする」など、疾病のコントロールや地域での生活を維持し人間関係を築いていくために、医療者の細やかな支援を受け、相談し合える場所としての機能が患者の居場所としての機能に関わっているととらえていた。

2) ソーシャルスキルを再獲得する

【ソーシャルスキルを再獲得する】は、患者や医療者との関係性の中で、生活に必要なスキルや、無理をしないで生きていくための対処方法を獲得する機能を意味し、〔人と関わる〕〔自分のペースをつかむ〕〔助け合う〕〔社会性を学ぶ〕の4つのサブカテゴリーで構成されていた。〔人と関わる〕では、デイケアで過ごすことで「周囲の人と関わりを持つ」「人間関係を学ぶ」「他のメンバーさんたちとの付き合い方、コミュニケーションを学んでいくことで、自分の気持ちを抑えることを知っていく」など、患者同士の付き合いや、対人関係能力の再獲得のために必要なスキルを身につけていることをとらえていた。その過程において「自分のペースを持ちながら周りに関わっていくことが必要」「一人一人の段階をふまえ、集団の中に居ながらも自分のペースで過ごす」など、人との関係において無理をせず、自分のペースで関係が保てるよう〔自分のペースをつかむ〕こと、「お互いに支えあって生きている」「社会背景が違う個人が何かの縁で結びつき、助け合って生きていく」など、人とのつながりを通して他者を気遣い仲間同士が〔助け合う〕こと、「最低限のルールやマナーを守れるようになる。」「困難な問題に対処し、乗り越える力を養う」「役割意識や収益を得たりするなどの社会的意味の役割がある」など、困難な問題への対処や社会のルールを守るために〔社会性を学ぶ〕ことが、ソーシャルスキルを再獲得する機能に関わっているととらえていた。

3) 生活を再構築する

【生活を再構築する】は、デイケアに通うことで生活自体に変化が起こり、自分の力で人生を切り拓こうとする気持ちが育つ機能を意味し、〔生活のリズムができる〕〔自立の準備〕〔生き方を探る〕〔困難に立ち向かう〕の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

〔生活のリズムができる〕では、「規則正しい生活（決められた時間そこにいる）を学ぶ」「活気がでたということ、それだけ生活が楽しい」「住まいから、デイケアにくること、くる途中でも、来て、廊下や階段をあがることもその人のデイケアの意味がある」など、デイケアに通うだけでも生活にメリハリが生まれ、生活が整えられ、活気を取り戻すことにつながることをとらえていた。〔自立の準備〕では、「デイケアは社会へ戻る前のクッションである」「目的が自立を促す」など、安心して包まれていられる場所で社会参加するために必要な力を養い、デイケアプログラムに参加することにより社会参加のために必要なスキルや態度を養い、自立への準備性を高めっているととらえていた。〔生き方を探る〕では、「生きる姿勢をみつめていく」「それぞれ自分自身で何かを見つけ出そうとしている」など、自分の存在の意味を見出そうとしていることをとらえていた。〔困難に立ち向かう〕では、「現実社会（辛い現実）に戻らなければならないので、適応できる力をつけている」「現実立ちは向かったり、背を向けたりして少しずつクリアできる様に奮闘しておられる」「通うのに一時間かかっても、身体がだるくても、デイケアでの時間が少々つまらなくても、このメンバーは通いつけている」と、自分自身への課題に奮闘しながら、社会で直面する問題に適応する力を養い、生活を再構築する機能に関わっているととらえていた。

4) 自分と向き合う

【自分と向き合う】は、自分のもつ力を客観的に認め、生き方を決定し、自己洞察することで自己の存在価値を認め、適正を見出していく機能を意味し、〔自分を引き受ける〕〔自己決定する〕〔責任をもつ〕〔信念をもつ〕の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

〔自分を引き受ける〕では、デイケアで過ごすことで「客観的に自分を知る」「その中の自分の存在を認め合う」など、今の自分自身を見つめ直し、自分と向き合い、受容することができているととらえていた。また、「一日をどのように過ごすかは本人の自己決定に任されている」「それぞれが自らの意思に基づいて行動している」「思い思いの時間の過ごし方ができる」などから、自分の意思でデイケアでの過ごし方を〔自己決定する〕こと、「決めたことに責任をもつ」「自分の行動に責任をもつ」などから、自己決定したことに対し〔責任をもつ〕こと、「疾患を理解し、社会復帰を願っていれば、非社会的な行動は減る」「自分に誇りを持つ」などから、社会参加への〔信

念をもつ〕ことが、自分と向き合う機能に関わっているととらえていた。

V. 考察

学生の学びから抽出されたデイケアの機能を検討し、教育方法への課題を考察する。

1. デイケアの機能

1) 精神の安定を図り、地域生活を継続するための力を養う

病院からの移行期にある患者は、安心して休息できる『居場所』を求めている。『居場所』について青木²⁾は、馴染むことを苦手とする患者にとっては、馴染んで同一化した場所であり、対人関係に緊張しやすい患者にとって、一人になれる場所は安心できる場でもあると述べている。社会に『居場所』を獲得する過程において、“こうありたい自分”と“現実の自分”に折り合いをつけ、対人関係を維持していく中で自分流の住まい方を見出し、『居場所』を獲得していく³⁾。患者は、社会適応を目指せば現実的な葛藤を体験し、自己の安定を優先すれば自己評価を下げてしまうという矛盾を感じており、こころの拠り所を求めている⁴⁾。同じ疾病を抱える患者同士の心のつながりや支え合いが存在している場所で、楽しいと感じながら時間を過ごし、仲間との連帯感を実感することで、葛藤や不安定さを抱えながらも精一杯生活している患者のこころの安定がはかれる。また、明確な目的が持てないままデイケアにひっそりと存在している患者にとっては、医療者や他の利用者の声や気配を感じることで、無条件に温かく受け入れられる場所となり、安心して一人で居られる空間が形成され、地域での生活を継続させる原動力を培うことができるのではないだろうか。

地域での生活に神経を使い、様々な体験をしている患者にとって、心の拠り所や仲間同士の関係性の構築、医療者との相談窓口としての機能を備えた『居場所』は、自己の安定が図れ、デイケアが精神的な安寧と地域での生活を維持していくための治療的な環境となり得ている。患者達は、日常の中で立ち向かったり背を向けたりしながら、厳しい現実を受け止め、社会の中で自分がどのような生き方をするか模索している。思うように生きられない現実に直面しても、デイケアで守られている時間を過ごすことで、症状の悪化を避け、バランスを失うことなく困難に立ち向かう力が養われると考える。

生活の再構築につて、梶本ら⁵⁾は『生活の連続性が揺るがされる体験を得て、自分の病気・生活・社会などに関する捉え直しをして、その人らしい生活を立て直すプロセス』と定義している。人付き合いの範囲が狭く、新しい人間関係を構築することが苦手な患者は、ともすれば家族等の限られた人間関係の中でのみ生活しがちであ

る。患者はデイケアに通うことが生活の目標となり、目標を達成するために生活リズムを整え、社会生活を維持していくための日常生活スキルを取り戻し、自立に備えている。デイケア内の人間関係のなかで、人との付き合い方や気持ちを整える手立てを獲得することで、孤独になることを避け人とのつながりが維持でき、社会生活を営む上で必要とされる対人関係能力や自立への気構えを養っていると考える。さらに、デイケアでの過ごし方を自己決定する経験は、自分自身に誇りを持ち、行動に責任が持てるようになる。また、デイケア内での楽しみや役割を獲得することで、感情表出の機会となり、存在価値や生きがい、新たな人間関係の構築等、生きていくために必要なスキルを再獲得することにつながると考える。

2) 自己洞察を通し、病と共に生きていることを受容する

デイケアの利用者は、統合失調症患者が70～80%を占めているが、感情障害、依存症の患者も10%程度を占め、デイケア対象疾患の多様化が指摘されている⁶⁾。統合失調所患者においては、デイケアに通う時期は、病気と折り合いをつけながら、生活のコントロール感や世の中とつながる実感を新たに獲得していく局面⁷⁾である。自分の傾向や、自分にできることが何かを検討し、できることから一つずつ挑戦し、自信をつけていく過程を自己確認・自己認識ととらえると、客観的に自己の振り返りや自己確認した結果、自分のもつ能力を正当に判断し、無理をせずに生きていく姿勢で、社会生活に適応しようとする「障害受容」に結び付くのではないかと考える。

一人ひとりの生活は未来に向かって当たり前が続いていくものであり、自分の生活として生きている実感を伴うものとなる⁸⁾。再構築された生活は、発病前の生活と分断されたものではなく、病気と共にある生活を取り戻すということである。疾患に伴う様々な経験を否定せず、病とともに自分を引き受け、自分の人生の一部分であることを受容する場としてデイケアが機能することで、病からの回復と社会生活の継続のための第一歩が踏み出せるのではないだろうか。

2. 教育方法への課題

学生にとって「居心地のよい場所」とはどのような場所であるのか、自分自身の体験とデイケアでの学びを結びつけることで、安心できる居場所を整える看護介入について学ぶ機会とする。

患者の抱く生活の形は様々であり、デイケアに求められている機能は、背景の異なる患者のニーズにきめ細やかに対応することである。患者の生活や身体状況、他者との関係性など、患者を取り巻いているさまざまな状況に対処できるよう、患者一人一人が抱えている問題の特性を見極め、誰からどのようなサポートを提供されると有効なのかなど、利用可能な資源や力を1つ1つ検討し、患者がどのようなサポートを必要としているのか分析す

る事例検討の機会を設けることが必要ではないだろうか。その上で、患者にとっての「社会復帰」の意味と、自分たちに何ができるのかを考察することで、デイケアの機能を果たすための看護師の役割や介入の手立てを見出す機会になると考える。

おわりに

学生は、患者の語りを通して、デイケアには患者が自己の安定をはかり、社会生活に適應するための自己洞察や、障害受容の場としての機能があることを学んでいた。精神疾患に対する構えを軽減できる実習形態を検討し、学習内容を意味づけしていくことの重要性が示唆された。

本稿は、第28回日本看護科学学会学術集会において発表したものに加筆・修正を加えたものである。

文献

- 1) 厚生労働省精神保健福祉対策本部：精神保健福祉の改革に向けた今後の対策の方向（中間報告）、2003
- 2) 青木典子：病院から地域への移行期における精神分裂病者の「居場所」の考察。こころの看護，1（3），253-260，1997
- 3) 熊澤恵利子他：精神科デイケアの現状と今日的課題－精神科デイケア利用者の社会生活におけるニーズを中心に－。東海大学健康科学部紀要，8，73-79，2002
- 4) 奥村太志他：統合失調症者の障害認識・受容と社会復帰後の生活についての検討－デイケア通所者の面接を通して－。名古屋市立大学看護学部紀要，5，2005
- 5) 梶本市子他：精神障害者の生活の再構築に関する研究，平成12・13年度科学研究費補助金研究成果報告書，2003
- 6) 前掲書3)
- 7) 前掲書5)
- 8) 前掲書5)

The functions of a psychiatric day-care center from students' viewpoints and challenges to educational methods: A review of students' records of psychiatric nursing practice

Yumi SAWATA 1) , Sachiko TANGE 1)

1) Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

Students' records of psychiatric nursing practice at a day-care center for psychiatric patients were reviewed to identify the functions of a psychiatric day-care center and challenges to educational methods. From descriptions in their reports, four factors were extracted as the functions of a psychiatric day-care center: to “serve as a home” for patients, and help them “recover social skills,” “rebuild daily life,” and “reflect on the self.” The function as a home for patients was associated with a need for self-stability; the function as a place for patients to develop peer relationships as well as an interface between the patients and healthcare professionals was involved with a trigger for significant changes in life, the acquisition of essential life skills and measures to unlock the future without strain, and the reconstruction of a life accompanied by the disease; and the function as a place for patients to reflect on themselves was involved with the facilitation of a daily life rhythm to adapt to society, the expression of positive attitudes toward society, and the stabilization of symptoms. These factors, which constitute the basis of specialized nursing intervention at a day-care center, suggest that further educational effects can be obtained by developing the meanings of the contents of students' learning.

Key words: psychiatric nursing practice, psychiatric day-care center, educational methods